

藏王火山の近況

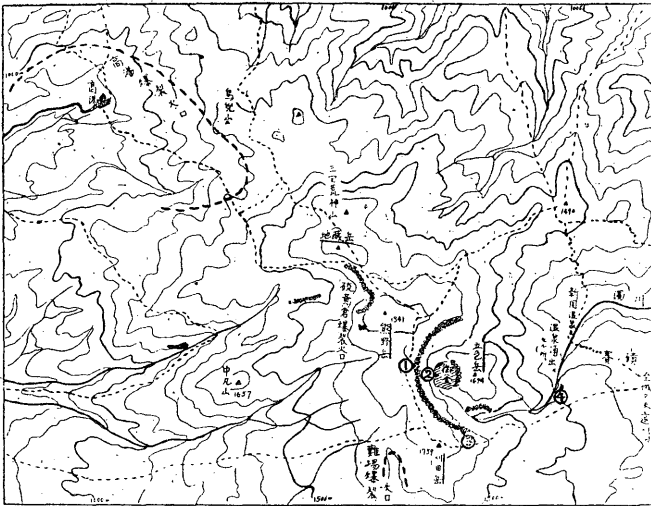
仙臺測候所 植野隆壽

霧氷で有名な藏王火山は近年殆んどその活動が終熄し、何等の異常も示さざりし如きも、本年6月頃より活氣を呈し、恰かも爆發の危険性あるかの如く喧傳せられるに至りたれば、命により8月16日、17日星、牧田兩技手を第1班、9月12日齋藤、植野兩技手を第2班とし、續いて10月1日田島所長を第3班として出張し、實地踏査を行ひたり。次にその概要を報告し將來參考の資に供したし。

藏王火山は宮城、山形兩縣境に聳え、那須火山脈に屬す。刈田岳(1,759米)より熊野岳(1,841米)を連ぬる環壁を外輪山とし、五色岳(1,674米)を中央火口丘とする二重火山北藏王と、その南方に接して東に展きたる大爆裂口を有する屏風岳(1,817米)一帶の南藏王山より成る複雑なる双子狀火山なり。有史以來活動の歴史を有し、今回又異常を傳へられたるは北藏王山なり。

(1) 山頂には噴火口あり、その中に中央火口丘五色岳及び御釜爆裂火口、北西山腹には高湯の大爆裂火口あり。その他硫黃倉爆裂火口及び中丸山寄生火山は西側に、難場爆裂火口は南側にあり。噴火口(第1圖參照)は略圓形にしてその直徑1軒餘、熊野岳、馬の脊、刈田岳等孤狀をなして、その北・西・南壁を作り、東壁は全く缺損してその痕を留めず。熊野岳は火口の北西壁にありて藏王火山中の最高峯をなし、刈田岳は南西壁に起る。馬の脊はこの兩者間を連結して南北に延びたる馬脊狀の峯にして、其の東側は直ちに火口に臨みて高さ150米餘の絶壁をなし、西側は緩傾斜をなせり。五色岳は此の火口内に噴出したる中央火口丘にして、噴氣作用等により岩片は赤、綠、白等種々なる色を呈せるによりその名を得たるなり。主として火山砂礫等の抛出版物より成る所謂抛出版物堆積丘なり。山頂には火口を有せず、西半部は御釜の爆裂作用の爲、南部は濁川火口瀨の上部大黒の爆裂作用の爲に崩壞せられ、孰れも砂礫層の絶壁を露はす(寫眞3のA)。御釜は藏王沼と稱し、爆裂火口湖にして、略圓形をなし直徑凡そ600米摺鉢狀をなし、東面は五色岳の斷崖之を繞り、山側削れる

第1圖 藏王火山地形圖



○ 寫眞撮影場所と方向

が如く此處に 80 米餘 (湖水面上) の絶壁を作れり。西・北・南の三面は噴火口底の低地を隔て、馬の脊、熊野岳、刈田岳に對す。水深は 39 米内外なり。濁川火口瀨には硫黄噴氣孔及びその痕跡處々にあり、又硫黄を堆積せる所少からず。明治 28 年の爆裂以前は盛んに硫黄採掘せられしが、今は全く中止せられたり。火口内の水は火山礫層を滲透し出でて二流となり、五色岳の南及び北山麓を繞り、合流して一となり所謂火口瀨となつて東流し、濁川と稱せられ、峨々遠刈田等を過ぎ遂に白石川に入る。濁川の名はその水の濁濁せるによる (1) 大日本地誌その他による)。

活動の歴史は震災豫防調査會報告第 86 號によると、寛永元年 (1624) に始まり、續いて寛文 9 年 (1669) には刈田、柴田、名取等數郡に降灰あり、文政 3 年 (1821) には熊野岳鳴動し、湖水俄かに沸騰し、溢水澤に激流し、濁川は二丈餘の洪水となり、忽ちにして白石川に押出し、河川一面に泥水を流し近傍には硫黄 2—3 寸堆積せり。慶應 3 年 (1867) には熊野岳鳴動し湖水沸騰し硫黄混りの泥水 2 丈餘の洪水となり、麓の温泉にありし浴客は俄かの洪水にて逃げ残りたるもの 3 名死亡せり。爆裂後噴煙は止まず時々黒煙を噴出せしも御釜の

水の沸騰せしことなく自然黒煙も止み、湖水には雪中水を結ぶに至れり。その後長年間活動なく、明治 27 年 (1894) 2~3 月頃より噴煙を、7 月 3 日山麓の一部に降灰を認む、越えて明治 28 年 (1895) 2 月 15 日午前 9 時 30 分頃俄然鳴動噴煙し、湖水氾濫し、松川、白石川に流れ、魚類斃死す。同月 19 日にも同様の活動あり。續いて 9 月 27 日午前 5 時頃熊野岳附近にて鳴動し、御釜噴煙す。後 10 分程を経て青根及び川崎村近傍に降灰あり、雨の如し。濁川出水し溪間の響夥しく、激流山をなし、僅かにして減水したるも遠く白石川に押し出し、現場より 12~13 里を隔たりたる大河原地方へ流れ來りしは同日午前 9 時頃にして、魚類悉く弱り手にて取るもの夥し。その後一週間を経過するも、白石川の澄む傾向なし。明治 30 年 1 月 14 日 (1897) 午前 0 時 30 分藏王山鳴動噴煙す。尙大正 7 年 (1918)~大正 12 年 (1923) 間に於て時々小活動を繰返したるも後休息状態となりて今日に及び、御釜内の水は冬期結水するに至れり。以上有史以來の藏王火山の活動は何れも御釜爆裂火口附近に起り、その活動勢力は弱く、僅かに湖水を沸騰溢し附近に降灰せる程度に止れり。而して活動の週期は 1624 年より 1921 年の 297 年間、9 週期として (1669~1821 年間には記録なきも、この間 5 週期を考へる) 計算すれば平均 33 年となる。

實地踏査の概況

8 月 16 日

大黒爆裂火口より御澤に降り、濁川に沿うて御釜下まで廻り、附近状態を調査せしも、沿岸に瓦斯噴出、蒸氣噴出等を認めず。尙途中硫黄採取坑二ヶ所ありたるも、その内部は何等異状を認めず。

8 月 17 日

御釜湖岸に至り附近状態を調査す。

湖岸水	温	深さ	20 糎	15.8°C
砂中	温度	深さ	30 糎	15.0°C
氣	温 (通風寒暖計)			14.2°C

湖面は藍白色を呈し、一帯に溷濁し、透明度は約 1.5 米にして、該地附近の人々の觀察を綜合するに、茲 2~3 年來透明度低下の傾向あり。御釜中心附近に瓦斯噴出の爲、直径 2~3 米の稍々圓形の波紋現れ (寫眞 2 の A)、殆んど

その形及び位置變化せず。湖心を通る南北の直徑を境として、その東半部に瓦斯噴出個所 10 數ヶ所あり時々波紋出沒す。五色岳崖下に 20~30 米に互り著しき瓦斯噴出ありて、湖岸は白色に泡立ちて見ゆ。

該地附近の人々の觀察に依れば、從來御釜の瓦斯噴出個所は 8ヶ所位なりしが、6 月頃より次第に増加し來たれりと。

尙大正 10 年來湧泉枯渴の爲、閉鎖せられ新關溫泉に、6 月頃より再び湧泉し始め、泉質は酸性硫黃泉にて溫度は約 70°C なり。新湧泉地點は前湧泉點を距たること約 10 間の所にして、泉質は従前と異れり。以前は鐵泉なりし由なり。

9 月 12 日御釜の水は乳白青色（ポルドー色）を呈し、水量は幾分減少したる如くなり（旱天の爲？）。氣泡の環は強風の爲水面一帶波立ちて不明瞭なりしも、湖水の中央及び南西端にあり、直徑約 10 米略圓形をなし、風波の爲にも殆んどその位置を變へず、終始同一の場所にありたり。又南西端の氣泡環の中央よりは 12h 35^m 頃一時泥土を噴出せる如く黃褐色に濁りたるも、間もなく（約 2 分位）消失し、その後異常を認めず。尙湖面の西隅には小なる硫黃瓦斯の噴氣孔の如きものを認めたり（賽磧の上部及御釜の西壁上にて微かなる硫黃臭を感じたるも、こゝより噴出したるものと思はる）。溫泉湧出停止中の新關溫泉は濁川の北岸（寫眞 4 の A）にあり、今回又湧出を始めたる由なるも、それより上流約 500 米の地點にも新たに湧出し、湧出量も可なり多量なる如く、湯氣約 10 米昇騰し可なり遠方よりも望見し得たり（寫眞 4 の B）。9 月下旬新聞紙の報するところによれば、この附近に瓦斯噴氣孔多く、小鳥、野兎等の斃死せるもの多數ありたる由。御釜の水溫は今回は測定を行はざりしも、7 月末山形高工安齊教授の測定せるところによれば、湖底（39 米）にて 24°C、20 米にて 6°C、表面にて 13°C なり。又濁川の水は前回の調査に於て、星技手は上流にて殆んど異常なく飲みしも、筆者は俄々溫泉附近にて澁辛を感じ飲用すべくもなかりき。

10 月 1 日の踏査に於ては強風濃霧山を覆ひ詳細に調査し得ざりしが、霧の霽れ間約 30 秒あり、刈田岳より乳白黄色を呈したる御釜の水を望見し得たり。但し圓形の波紋は風波の爲認むることを得ざりき。9 月 12 日の踏査の際

と同じく、賽磧の上部に於て硫黄臭を感じたるは、湖面西隅の硫氣孔によるものならん。猶、刈田岳より馬の背の下り口に於ても硫黄臭を感じたり。當時西風 20 數米毎秒に達したるも、風下岩壁に依る渦流の爲、岩壁下の瓦斯の運搬せられしものと思はる。

以上は踏査の概略なり。御釜内の異常氣泡、新關溫泉附近の湧泉及び瓦斯噴出の様子は次第に活動勢力を増加したる如く思はれ、湖水の水色は藍白色より、乳白青色、乳白黄色と次第に硫黄色を帯ぶるに至りたる如くなるも、目下のところ別に大したることなく、今後の發展に充分の注意を拂ふ必要ありと思惟せり。

(昭和 13 年 10 月 13 日)